

《資料紹介》

浄楽寺第 12 号古墳の出土・採集遺物

－広島県立歴史民俗資料館展示・保管資料を中心に－

村 田 晋 ・ 岸 本 晴 菜

-
- | | |
|--------------|---------|
| 1 はじめに | 4 勾玉の検討 |
| 2 埴輪の検討 | 5 おわりに |
| 3 鉄器・鉄製品類の検討 | |
-

【要約】

史跡浄楽寺・七ツ塚古墳群で最大の古墳、浄楽寺第 12 号古墳は、過去に発掘調査が行われたが、出土遺物に関する詳細な報告は行われてこなかった。また調査後に採集された遺物も蓄積されている。本稿は、同古墳の資料のうち広島県立歴史民俗資料館に展示・保管中の埴輪、鉄器・鉄製品類、勾玉について整理作業、資料調査を実施した成果を報告し、今日的水準から同古墳を再評価する資料を提供するものである。

1 はじめに

浄楽寺第 12 号古墳は浄楽寺・七ツ塚古墳群中で最大の古墳であり、同古墳群で確認されている 176 基のうち発掘調査が行われた数少ない古墳の一つである。浄楽寺第 12 号古墳（調査当時は第 1 号古墳と仮称）は昭和 29 年に広島大学所属者を主たるメンバーとして発掘調査が行われた。墳頂部で粘土槨 2 基が検出され、A 主体で鉄鏃 2・刀子 2・鉄片 3、B 主体でガラス小玉約 100・瑪瑙製勾玉 2 が出土したほか、墳丘上で円筒埴輪・家形埴輪が出土したとされる（松崎・潮見 1954）。

現在、これらの遺物は広島大学考古学研究室（以下、大学とする。）が所蔵し、埴輪・鉄器を中心とする遺物を古墳群併設の広島県立歴史民俗資料館（以下、資料館とする。）が借用・保管中である。今回の資料調査に先立つ整理作業開始時点では、資料館の常設展示室には、昭和 29 年出土遺物のうち円筒埴輪、家形埴輪、鉄器、瑪瑙製勾玉が展示されていた。この他、発掘調査以降に資料館が収集・保管してきた遺物も少量存在していた。

出土・採集遺物のうち鉄製品類、勾玉等の一部は図化・公表されているが（第 1 図）、その他は図化されてこず、製作技術や年代等の詳細な検討も行われていない。出土遺物については、接合等の基礎的な整理作業さえ未了の状態大学から資料館に貸し出されたが、多くの調査資料を抱え多忙となった大学側による遺物整理作業は、資料との距離が離れたことでついに停止した。また、資料館側も借用者としての立場から状態変更しない日々が続き、今日に至ったと推察される。

三次盆地に初期群集墳が数多く展開する意味を考察するにあたり、同古墳出土・採集遺物の基

本情報を明らかにすることが重要と考えたため、まずは広島県立歴史民俗資料館に展示・保管中の遺物を対象に整理作業、資料調査を実施することにした。1～7・10・12～20は大学から資料館に貸出中の遺物、8・9・11は資料館が独自に収集・保管中の遺物である。

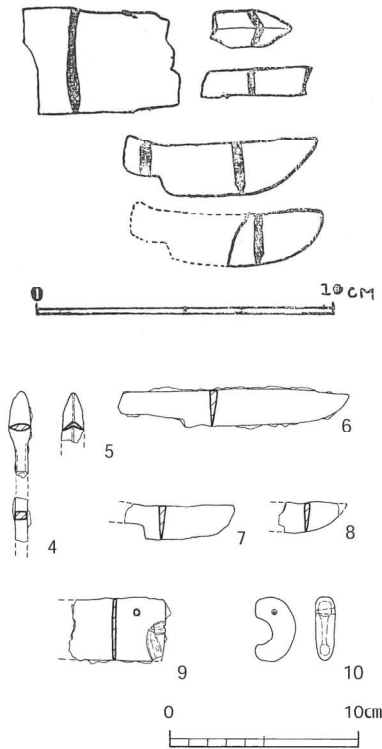
なお、本稿は1～3・5を村田、4を岸本が執筆した。関連する遺物の整理・図化・写真撮影も同か所の執筆担当者が行った。本稿は連名による発表形態をとるが、各執筆担当者の意見を尊重し、表現など細部の統一は図っていない。

2 埴輪の検討

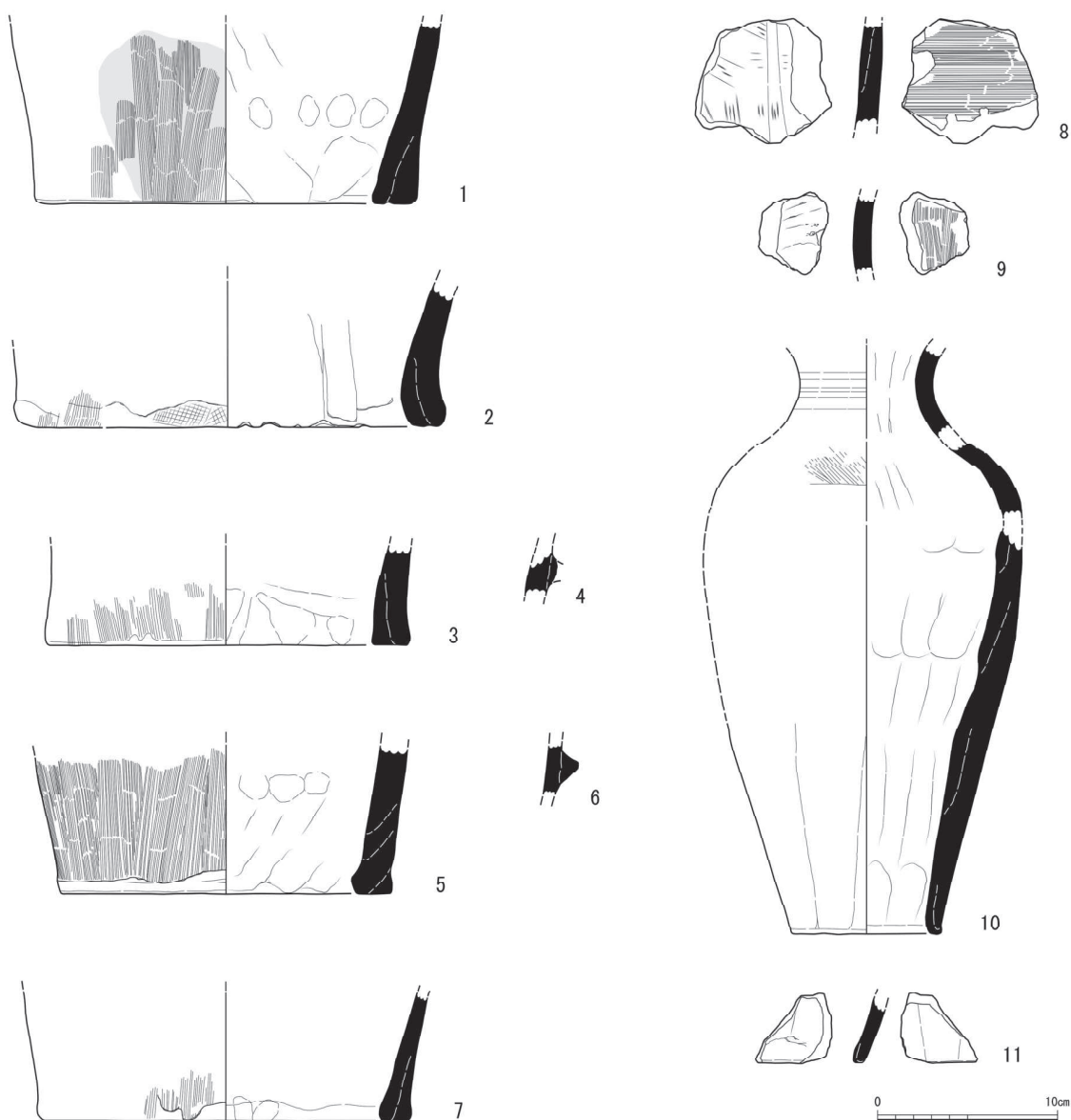
出土埴輪の大部分は資料館に貸し出されており、資料館のなかでさらに、常設展示に供されている展示品と、収蔵庫内でコンテナに収納保管されている非展示品とに分かれていた。今回、実測を実施する前に、試しにこれら破片同士の接点の有無を確認したところ、展示品と非展示品の間に接合関係がみられることがわかった。接合関係が未検討のまま今日まで来ていることが判明したため、所蔵者である大学、借用者である資料館の双方から許可を得て、令和3年12月26日に、破片の接合作業を実施した。展示品・非展示品を問わず、各破片には「南2」「①」「中段No.2」「浄楽寺12号」の計4通りの注記が施されており、非展示品については注記名ごとに収納コンテナが分かれていた。この注記名が出土地点の違いを示すと考えられたため、同一の注記が施された破片同士で接合を試み、接点が確認された破片同士をシアノアクリレート系接着剤（セメダイン、CA-281）で接着し、最低限の補強のため一部に石膏を充填した。作業の結果、相当数の破片が接合し、埴輪は数個体にまとまることが判明した。円筒埴輪は少なくとも5個体以上が存在することが判明し、また、これまで存在を認識されていなかった壺形埴輪が含まれていることも新たに判明した。

後述の報告遺物（第2図）のうち、1～7・10は昭和29年の発掘調査出土遺物（大学所蔵）であり、8・9・11は付属のラベルによれば、1986年3月9日に段築面東側で採集されたもの（資料館所蔵）である。大学所蔵資料は、展示に供するために資料館に貸し出され、保管中のものに限り紹介する⁽¹⁾。ここで紹介する埴輪片は、現在大学に所蔵・保管されている埴輪よりも残存率が高く特徴がよくわかるため、そのみで築造時期その他の考察を行っても大過はないと考える。

円筒埴輪 1～9は円筒埴輪である（図版第1～4）。基底部片を中心とするが、最下段突帯まで残った個体はなく、基底部高が判明する資料はない。1は基底部片である。「南2」の注記がある。2分の1周程度残存し、底部復元径は20.6cmとなる。外面にはタテハケ調整、内面にはナデ調整、指頭圧痕が観察できる。指頭圧は基底部側から手を入れて行ったようで、圧痕がある位置と対応する位置の底部が薄くなっている。底部は巻き上げる粘土が集中したか、粘土が付加された等によって厚さ2cmを超えており、底面の粘土の継ぎ目と考えられる位置が凹む。自重で潰れて明瞭



第1図 既発表の遺物実測図
（上：松崎・潮見1954、下：伊藤2004）



第2図 浄楽寺第12号古墳 埴輪実測図 (1/4)

に底面ができ、植物茎圧痕のような凹みが観察できる。胎土はやや粗く、径2.0～5.0mm程度の石英、径1.0～4.0mm程度の長石を含む。焼成は良好で、外面が橙色(5YR6/8)、内面が黄橙色(10YR8/6)を呈し、外面側がよく焼ける。外面には広い範囲に黒斑が観察できる。

2は基底部片である。「南2」の注記があるが、1とは別個体と判断できる。2分の1周程度残存するが、接合しない破片3点から実測した。また、特徴的な調整を図示するため、連続しない部位を並べて図化していることに留意いただきたい。底部復元径は23cmとなるが、器形の歪みが大きく、計測箇所により変動の余地がある。外面は風化により大部分が不明瞭だが、一面ではタテハケが観察でき、その後にナデ調整が施されている。また別の面では底部側の粘土が上方に大きく動いて器壁に被っており、その関係で底部断面形態が丸みを帯びる。器壁に被った粘土には網目状の布圧痕が観察でき、製作時の敷物に用いた布に由来するか、粘土の可塑性を戻すために濡れ布を被せた痕跡等(廣瀬2021)が想定できる。なお、この布圧痕は底面には観察できず、倒立してナデ消されていると考えられる。底面には植物茎圧痕のような並行する直線状の凹みがあ

る。内面にはナデ調整、ヘラナデ調整が観察でき、ヘラナデによって粘土が下方に動いている。底部付近は粘土の付加によって肥厚し、自重のためか断面形態は内側に折れ気味である。胎土は密だが、径 0.5 ～ 1.0 mm の石英・長石を多量に含む。焼成は良好で、色調は内外面とも橙色 (5YR7/6) を呈するが、断面はやや焼きが悪い。

3 は基底部片である。「①」の注記があるが、5・6 とは別個体と判断できる。ほぼ全周し、底部径は 20.0 cm である。外面はタテハケ調整後に底部付近のみヨコナデ調整が施されている。ナデ消されなかったタテハケは底部端まで及ぶ。内面はナデ調整、指頭圧痕が観察できる。底部は粘土付加等により肥厚し、明瞭な底面ができる。底面には植物茎圧痕のような、同一方向に直線状に並走する凹みが観察できる。胎土は密で、径 0.5 ～ 2.0 cm 程度の石英・長石を含む。焼成は良好で、色調は内外とも橙色 (7.5YR6/6) を呈するが、断面の一部はやや焼きが悪い。

4 は突帯片である。「①」の注記があり、3 と同一個体の可能性がある。外面に突帯の剥落痕が観察でき、剥落部にごく浅い凹線が水平に残っている。突帯間隔割付の痕跡とみられる。突帯の形状自体は欠損するためわからない。内面はナデ調整が施されている可能性がある。胎土・焼成・色調の状態は 3 と同一である。

5 は基底部片である。「①」の注記があるが、3・4 とは別個体と判断できる。2 分の 1 周程度残存し、底部径は 18.2 cm となる。外面には下方向へのタテハケ調整が観察でき、底部付近の一部にタテハケの及ばなかった余地が残るが、この余地に動いた粘土が被っている。底部にはその後ヨコナデ調整が施されている。タテハケは底部端まで及ぶ。内面にはナデ上げ調整、指頭圧痕が観察できる。明瞭な底面ができ、植物茎圧痕のような凹みが残る。胎土は密で、径 0.5 ～ 1.0 mm 程度の石英・長石を含む。焼成は良好で、内外面とも橙色 (2.5YR7/6) を呈する。一部に面的な黒斑が観察できる。

6 は突帯片である。「①」の注記があり、5 と同一個体の可能性がある。突帯は基部で幅 2.0 cm 程度、突帯先端部で幅 0.5 cm 程度と、断面は裾の広い台形である。内面は調整不明瞭である。胎土・焼成・内面色調の状態は 5 と同じであり、外面の色調はやや火まわりが悪いためか浅黄色 (2.5Y7/4) となる。

7 は基底部片である。「中段 No. 2」の注記がある。断面が風化し接着は難しいが、全周する。底部径 20.0 cm である。外面は風化で大部分が不明瞭だが、一部に下方向へのタテハケ調整が観察できる。これにより表面の粘土が下方に動き、底面の一部に被っている。内面も同様に不明瞭だが、底部付近にナデ調整と指頭圧痕が観察できる。底部は粘土が付加された等により肥厚し、自重で潰れて明瞭に底面ができ、底面に植物圧痕が観察できる。胎土はやや粗く、径 1.0 ～ 2.0 mm の石英・長石を多量に含む。焼成は良好だが、軽い焼き上がりである。色調は内外面とも橙色 (5YR7/8) を呈するが、外面の一部には焼きが悪く、やや黒味がかかる部分がある。

8 は胴部片である。上述してきたように、基底部外面にヨコハケ調整がみられる個体がないことから、最下段突帯よりも上の部位にあたると考えられる。外面には全面にヨコハケ調整、内面にはヘラナデ調整が観察できる。外面のヨコハケ調整は、残存器面高約 6 cm の間にみられる条痕すべてが平行しており、原体の端部を示すような上下の段差が観察できない。観察できる範囲においては、途中で縦や斜めの休止痕はみられない。施されているのは、A・C・Ba 種ヨコハケとはなりえず、Bb・Bc・Bd 種ヨコハケのいずれかである蓋然性が高い。胎土は緻密で、径 0.5 ～ 1.0

mmの石英・長石・角閃石を含む。焼成は良好で、内外面とも橙色（5YR6/6）を呈するが、断面には少し焼きの悪い部分が見られる。

9は胴部片である。突帯付近ではない。外面には上方向に向かう縦ハケ調整、内面にはヘラケズリ後にナデ調整が観察できる。胎土は緻密で、径0.5～1.0mm程度の石英・長石・角閃石を含み、8と似る。焼成は良好である。色調は外面が橙色（5YR6/6）、内面が明黄褐色（10YR7/6）を呈し、外面側がよく焼ける。

壺形埴輪 10・11は壺形埴輪である（図版第5）。10は基底部から胴部中位にかかる破片、肩部片及び頸部片の、接合しない3つの破片から図上復元した。復元は比較的残存率の高い基底部から胴部中位にかかる破片を基本に行った。ただし、肩部及び頸部は細片であるため、当該部位の傾きには変動の余地がある。基底部から胴部中位にかけては完形品として実測、頸部以上は反転復元実測した。各部位の破片は、いずれにも「浄楽寺12号」の注記があることに加え、色調及び胎土が似通っており、同一個体と判断できる。底部から胴部にかけて直線的に幅を増し、肩部以上で急速に幅を減じるプロポーションと推測できる。底部径8.2cm、胴部復元径約17cmとなる。器高は32cm以上と推定できる。頸部の外面には指以外の原体を用いたヨコナデが観察でき、内面には絞り目の上からナデ調整が施されている。肩部の外面には斜めハケが観察できるが、下位は単位不明のミガキ調整によって磨き消されている。内面には縦位のナデ調整が施されている。胴部以下、基底部にかけての外面には縦位のミガキ調整が観察できる。器面の砂粒が押し込まれて面ができており、左の面が隣り合う右の面に対して切り勝っている。図上で見た場合、基底部を反時計回りに回転させて持ち替えながら、順次ミガキ調整が行われたと考えられる。ミガキ調整の後、底部にヨコナデが施されており、その後、自重によって基底部が若干変形し、下端に面ができています。底部の孔は焼成前後に穿孔されたものではなく、あらかじめ開放して作られている。胴部以下、基底部にかけての内面には粗めのナデ上げ調整が基本に施されており、指頭圧痕が残る。底部のみ開放した孔側から手を入れて指頭で押さえて調整した圧痕が残る。器厚の変化や断面観察により、底部から胴部にかけては粘土紐の内傾接合により成形されていると考えられる。胎土は緻密で、径0.5～2.0mm程度の石英・長石・角閃石を含む。焼成は良好である。色調は外面の代表色がにぶい褐色（7.5YR5/4）だが、外面底部付近の一部と内面は褐灰色（10YR4/1）を呈し、やや黒味が強い。正立状態で焼成されたが、底部孔が閉塞状態となった等の理由により、内面及び底部付近のみ火まわりが悪くなったためと推測する。

11は底部片である。10とは別個体である。外面には縦位のミガキ調整が施されて面ができています。内面にはナデ上げた調整が観察できるほか、底部側の粘土が上方に動き、被っている様子が観察できる。胎土は緻密で、径1.0～3.0mm程度の石英、径0.5～1.0mm程度の長石・角閃石を含む。焼成は良好である。色調は内外面ともににぶい黄橙色（10YR6/4）を呈する。

年代を中心とした考察 まず円筒埴輪は基底部片を中心とし、少量の突帯付近の破片、胴部片も存在する。黒斑が顕著で、野焼き焼成であることがわかる。基底部径は18～24cmの範囲にあり、調整は外面タテハケ、内面ナデを主体とする。突帯は断面台形で、凹線による突帯割付を行った痕跡がある。胴部片の中には、外面二次調整のヨコハケを施した破片がある。器面高約6cmの範囲のなかにヨコハケ単位の上下の重なりを示す段差は見当たらない。ヨコハケでもA・C・Ba種の可能性は消え、Bb・Bc・Bd種のいずれかに限定することができる（川西1978、一瀬1988）。

川西宏幸による「円筒埴輪総論」以降、円筒埴輪はⅠ～Ⅴ群の時期差を示す5類型に大別できることが示されており、現在でもその大枠は変わらず研究が進んでいる（川西 1978、一瀬 1988、廣瀬 2011・2015、木村 2022）。焼成技法については、Ⅲ群までの野焼き焼成とⅣ群以降の窖窯焼成に大別され、前者が古く後者が新しいという時期差に結び付く。浄楽寺第 12 号古墳の円筒埴輪は黒斑を明瞭に残す野焼き焼成品であることが明らかで、Ⅲ群以前の型式（時期）にまず限定できる。Ⅲ群以前の円筒埴輪は、①口縁部高・突帯間隔・基底部高、②透孔の数および位置関係によって群が確実に分類される。しかし、浄楽寺第 12 号古墳ではその情報がわかる資料がない。補助的な属性として口縁部・突帯の形状、外面調整のあり方にも時期の下降による変化が指摘されるため、今回はそれを用いる。具体的には、外面調整二次調整、特にヨコハケに注目する。

ヨコハケは上述の川西編年で A・B・C の三種に大別され、その後、B 種が Ba～Bd に細分されている（一瀬 1988）。出土数が多く埴輪研究が進んでいる近畿地方の円筒埴輪において、Ⅱ群期までは B 種ヨコハケはごく稀で、Ⅲ群期以降になりようやく Bb 種主体にヨコハケが普及することがわかっている（木村 2022）。広島県においても、B 種ヨコハケはⅠ・Ⅱ群の円筒埴輪には確認できず、Ⅲ群期以降に現れる（村田・永野 2022）。この状況からみて、浄楽寺第 12 号古墳の円筒埴輪はⅢ群に該当すると判断できる。

続いて壺形埴輪について残存率の高い個体 10 を中心に考察する。プロポーションは肩部以下が直線的な筒状で、底部の孔はもはや焼成前後の穿孔ではなく、最初から開放して作られている。外面は肩部以下にミガキ、肩部以上にハケが観察できる。内面は粗いナデで仕上げ、頸部には絞り目が残る。

壺形埴輪は古墳時代初頭からみられるが、当初の丸みを帯びたものから、概ね 4 世紀後半以降には筒状のものへと形状が変化することが北部・東部九州、北東部四国で指摘されている（4 世紀後半：村上 1988、円筒埴輪Ⅲ－2 期：蔵本 2004、集成編年 4 期後半：川部 2008）。広島県内でもⅠ群円筒埴輪を伴う福山市尾ノ上古墳例では底部が丸底に近く、Ⅲ群埴輪を伴う浄楽寺第 12 号古墳では筒状となり、サンプルは少ないが同様の変遷が伺える。

東広島市丸山神社第 1 号古墳、三次市浄楽寺第 37 号古墳でも底部形態がわかる壺形埴輪が出土しており、かつて相対年代を想定した（下江・村田 2020）。しかし、両古墳は共伴遺物が不明であり、年代的位置づけは型式学的観点に基づく仮説に留まっていた。今回、他遺物が伴う浄楽寺第 12 号古墳の壺形埴輪がその想定と矛盾なく位置づけられることによって、丸山神社、浄楽寺第 37 号の 2 例の位置づけも補強される。また、県内では出土例の少ない壺形埴輪が浄楽寺第 37 号古墳、第 12 号古墳と続くことも、造墓系譜を考える上で示唆を与えてくれる。

3 鉄器・鉄製品類の検討

刀子 3 点、鉈片 4 点、短甲片 1 点として展示されていた鉄製品類 8 点について報告する（第 3 図、図版第 6・7）。いずれも樹脂含浸処理が行われている。後述するように、鉈として展示されていた 2 点（17・18）はその形状から鉄鏃片と考えられる。松崎・潮見 1954 文献でも鉄鏃の出土報告がある。

刀子・鉈・鏃 12～14 は刀子である。12 は片関で、完形品である。長さ 12.3 cm、幅は身部で 1.8 cm、

茎部で 1.2 ～ 1.4 cm である。断面形は背を最大幅として刃に向かって細くなる逆三角形状であり、厚さは鋒付近では背側で 0.2 cm、刃側で 0.1 cm となるが、関付近の背側及び茎部で 0.3 cm とやや厚くなる。木質や布目等、有機物の痕跡は確認できない。

13 は身部のふくら付近である。大部分が欠損するため片刃箭鏃の可能性も否定できないが、本稿では刀子として報告する。残存長 3.0 cm である。断面形は身部の背側から中程までがほぼ一定し、刃に向かって曲線的に細まる。保存処理時の過剰な研ぎ出しにより背が磨り減っているが、厚さは背側で 0.3 cm である。

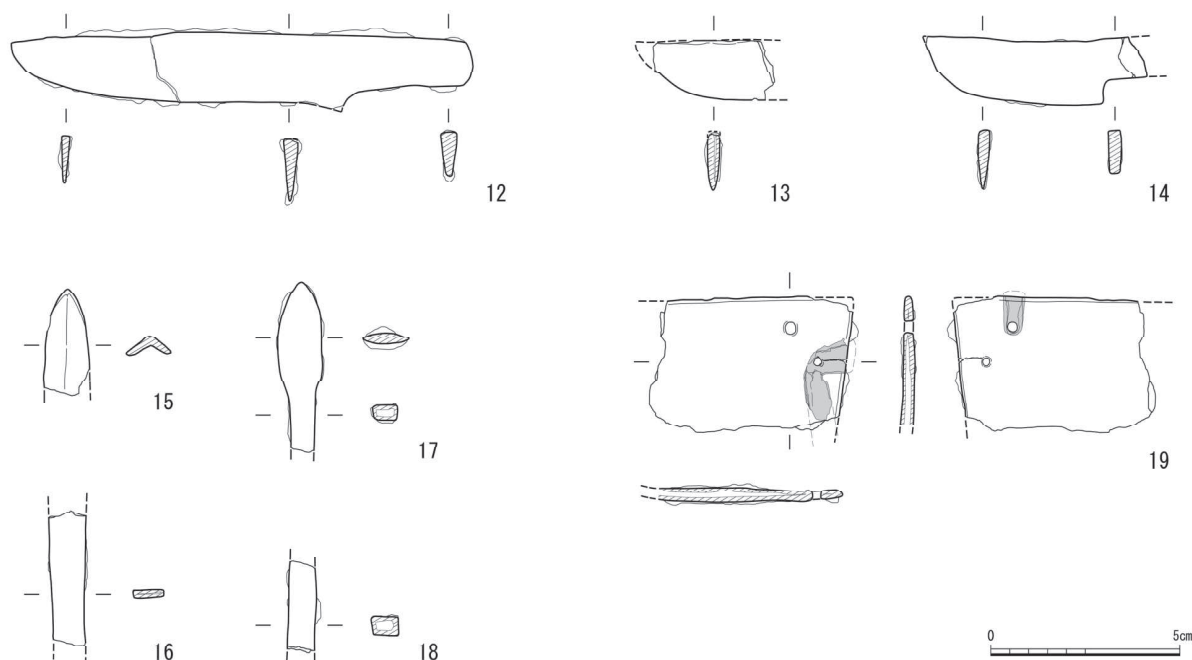
14 は片関で、茎部を欠損するが身部はほぼ完存する。片刃箭鏃の可能性も検討したが、茎部が薄いため刀子と判断した（図版第 6）。残存長 5.8 cm、身部長 4.7 cm である。幅は身部で 1.6 cm、茎部で 1.1 cm である。断面形は身部の背側から中程までがほぼ一定し、刃に向かって曲線的に細まる。茎部は厚さが一定する長方形である。厚さは身部の背側で 0.3 cm、茎部で 0.3 cm である。

15・16 は鉋である。15 は刃部片である。残存長 2.8 cm である。中央で明瞭な鐔をもって折れ曲がり、断面形は山形をなす（図版第 6）。厚さは最厚部で 0.2 cm 程度である。

16 は茎部片である。残存長 3.6 cm である。幅は 0.9 ～ 1.0 cm、厚さは 0.2 cm 程度である。15・16 は接点がなく、同一個体かどうかの判断はできない。

17・18 は鏃である。17 は身部から頸部にかけての破片である。残存長 4.5 cm、身部長 3.0 cm である。幅は身部で最大 1.2 cm、頸部で 0.6 ～ 0.7 cm である。断面形は、銹膨れで不明瞭ながら身部では両凸レンズ状であり、茎部では長方形であり中空部をもつ。銹を除く推定厚さは、身部で最大 0.3 cm、茎部で 0.4 cm である。

18 は頸部片である。残存長 2.4 cm、幅 0.6 ～ 0.7 cm である。断面形は長方形であり中空部をもつ。厚さは 0.5 cm である。17・18 は接点がなく、同一個体かどうかの判断はできない。形状からみて、いずれも狭身有軸式鉄鏃（鈴木 2003）に該当する。

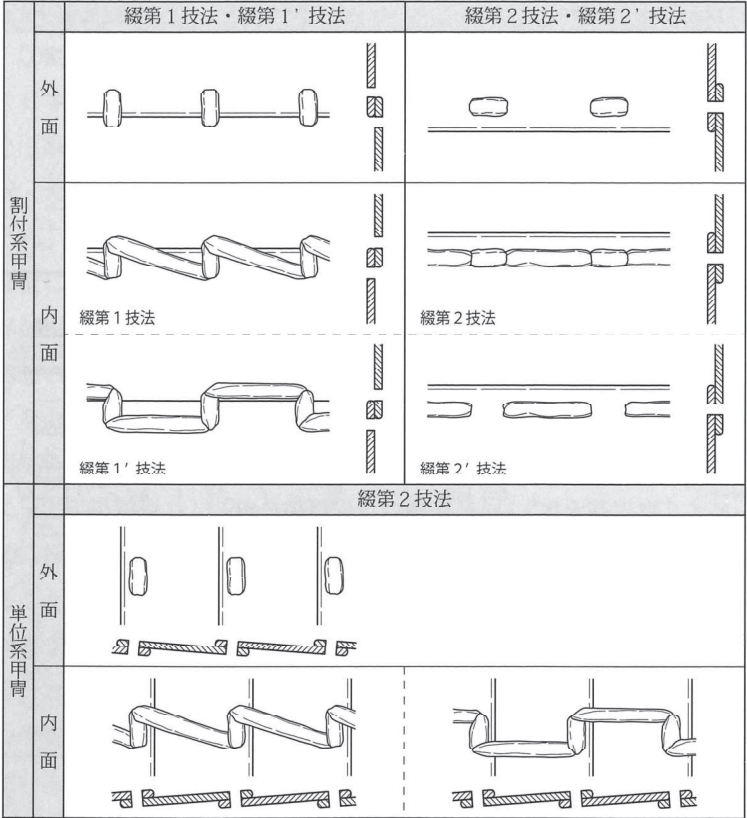


第 3 図 浄楽寺第 12 号古墳 鉄器・鉄製品類実測図（1/2）

短甲 短甲片として展示される鉄片 1 点(19)は、概報で「短甲の破片であろうか」と報告され(松崎・潮見 1954)、後発の文献(古瀬 1992、伊藤 2004)にて革綴短甲片とする情報が追加されて今日に至る。実測図は松崎・潮見 1954、伊藤 2004 に掲載されている(第 1 図)。いずれの文献もこの鉄片を短甲片としているが、その判断根拠について直接的な説明はないため、今回はそもそも短甲片としてよいかどうかという点から再検討した。結論的には、筆者も短甲片でよいと考える。

19 の鉄片は長軸 5.0 cm、短軸 3.5 cm、厚さ 0.2 ～ 0.4 cm 程度の方板状鉄片である。四周の縁辺部のうち二方向は欠損して破断面が見えているが(図版第 7)、残り二方向は原形を保っているため、この部品は板状鉄の隅部に相当すると判断できる。保存処理時のパテで覆われて表面の全体を観察することはできないが、孔が 2 か所に確認でき、そこを起点に有機物が付着する状況が確認できる(図版第 7)。付着状況は二面で異なっており、一面では有機物が、孔を起点として鉄片の長辺に向かって直行するように伸びている。もう一面では有機物が、また別の孔を起点として、鉄片の短辺に向かって直行するように伸びると同時に、斜交方向にも伸びている(鋸歯状の革綴痕)。

上述した有機物の付着痕跡は、革綴甲冑に典型的な綴第 1 技法の痕跡と考えられ(高橋 1995、阪口 2019、第 4 図)、この板状鉄片を甲冑片と認定する根拠とできる。破片にはわずかにしか湾曲がないことから、上下左右に湾曲の大きい冑の一部よりは、短甲の一部である蓋然性が高いといえよう。短甲片とみた場合、まず、鋸歯状の革綴痕がある面が内面、その反対の面が外面となる。部位については断定できないが、円筒埴輪Ⅲ群がみられる時期に中心的に副葬される帯金式短甲の 2 型式(長方板革綴、三角板革綴)いずれかの破片と仮に考えると、革綴痕の位置からみて、板の重ね順の関係上、鋸歯状痕跡が残らない豎上板・押付板・帯金・裾板・引合板といったフレーム部材である可能性はほぼ消える。孔の位置、鉄片の湾曲も総合し、地板の隅部と考えておく。なお、伊藤 2004 文献にも、短甲片とする根拠についての直接的な言及こそないが、今回示した革綴痕が表現された実測図が片面のみ掲載されている。ただし、同文献では欠損は一方向のみと判断して片小口側に向かう点線が 2 本記入されており、筆者とは形態復元の理解が異なるようである。(村田)



第 4 図 甲冑綴技法の分類図 (阪口 2019)

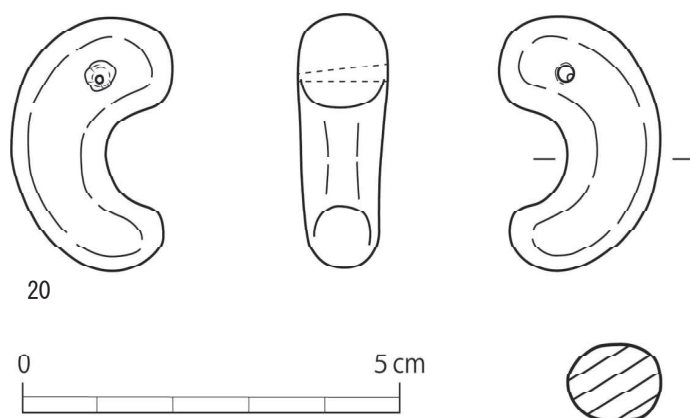
4 勾玉の検討

20は全長33.5mm、最大幅12mm、厚さ10mmの勾玉である(第5図)。石材は大部分が濃いオレンジ色を呈し、透明度は低いが良質な瑪瑙を用いている。表面に製作時の擦痕や目立つ研磨痕は残っておらず、全体に丁寧な研磨が施されている。断面は正円に近く、一定の厚みのある形状となっている。孔径2mmの片面穿孔で、一方には貫通時にできたとみられる微細な円錐状の割れが認められる。孔内に回転痕は観察できないことから、鉄針による穿孔と考えられる。

安芸・備後における瑪瑙製勾玉の出土傾向と時期 浄楽寺第12号古墳では、B主体からガラス製小玉約100点、瑪瑙製勾玉2点が出土したと報告されている(松崎・潮見1956)。ここでは広島県立歴史民俗資料館に展示中の瑪瑙製勾玉1点に焦点を当て、検討を加えていきたい⁽²⁾。瑪瑙製勾玉は、古墳時代前期後葉から終末期にかけて古墳への副葬が認められる玉類である。県内でも古墳時代前期末葉以降から次第に副葬事例が増加し、地域を問わず普遍的にみられるが、古墳時代前期～中期に帰属すると考えられる瑪瑙製勾玉の県内出土例の数は多くない(岸本2020)。出土地域は偏在的ではなく、安芸・備後全域で一定数出土している。後期に入ると、安芸北部と備後北部を中心に出土しており、その数も中期以前と比較して増加する。

中四国地方における弥生時代後期～古墳時代後期の管玉および勾玉の網羅的な変遷については、近年では米田克彦氏の研究がある(米田2020)。この検討では、管玉や勾玉の法量や形状、穿孔技術から石材別に変遷の検討を行っている。米田氏が提示した中四国地方の勾玉の変遷に挙げられている安芸・備後地域の瑪瑙製勾玉も含め、出土例をいくつか挙げると、安芸南部の恵下第1号古墳では、墓壇内から瑪瑙製勾玉が3点出土している(中田1977)。勾玉はいずれも全長30.0～32.0mmで同形同大である。その他、ヒスイ製勾玉、碧玉製管玉、ガラス製小玉などが出土しており、その時期は中Ⅲ～Ⅳ期と考えられる。備後北部の上定第27号古墳は、瑪瑙製勾玉2点、ガラス製勾玉1点とガラス製小玉が268点出土している(道上1987)。瑪瑙製勾玉は全長30.5mmと21.0mmでいずれも片側穿孔である。米田氏の勾玉変遷案では、中Ⅳ期に位置づけられている(米田2020)。同じく備後北部の酒屋高塚古墳第2号主体部からは、全長25.0mmで片面穿孔の瑪瑙製勾玉が出土している(青山編1987)。米田氏の勾玉変遷案で後Ⅰ期に位置づけられている。備後南部の亀山第1号古墳では、主体部の粘土槨内から瑪瑙製勾玉の他、碧玉製勾玉1点、滑石製勾玉65点、滑石製小玉655点などの様々な玉類が出土している(桑原編1983)。瑪瑙製勾玉は全長約30.0mmで片面穿孔、濃いオレンジ色を呈する石材が用いられている。幅は全体的に一定だが、細身である。共伴する滑石製玉類や緑色凝灰岩製管玉の形態も鑑みると、その時期は中Ⅰ期と推測される。

なお、県内で古墳時代前期に帰属すると考えられる瑪瑙製勾玉は、現状では安芸北部の横路小谷第1号古墳第2主体部



第5図 浄楽寺第12号古墳 瑪瑙製勾玉実測図 (1/1)

から出土した1例のみである。この勾玉は全長 38.5mm、幅 11.5mm で片面から穿孔が施されており、全体的に丁寧な研磨で仕上げられている（鍛冶 1982）。その形態的特徴から、時期は前Ⅶ期と考えられるが、浄楽寺第 12 号古墳の勾玉と最も形態が近似している資料である。

浄楽寺第 12 号古墳出土資料の時期 次に浄楽寺第 12 号古墳出土の瑪瑙製勾玉について形状や規格、穿孔方法からおおよその帰属時期の推定を試みる。

まず形状や規格に関して先行研究に基づいてみたい。瑪瑙製勾玉は前Ⅴ期（古墳時代前期後葉）に出現するが、この時期には全長 40mm 以上の大形で精巧なつくりのことが多いことが特徴である（大賀 2009、米田 2020）。ところが、中Ⅰ期（中期前葉）になると、やや小形化して全長 20～40mm のものが多くなり、全体的に整った C 字形を呈する。さらに時期が下ると、全長は 25～35mm 程度になり厚さは薄くなる。浄楽寺第 12 号古墳出土の勾玉は全長が 33.5mm、厚さが 10mm で製作時の擦痕を残さない丁寧な研磨が施されている。これらを先述の形態的特徴に当てはめると、古墳時代中期以降の特徴を持つ勾玉であると推測され、その上限を中Ⅰ期とすることが可能である。

続いて、穿孔方法に着目してみたい。玉類の穿孔方法は、両面穿孔と片面穿孔に大別することができ、これによりおおよその時期の推定が可能となる。穿孔方法に関しては、穿孔具の材質・穿孔形態などから玉類の穿孔技術の分類とその変遷が検討されている（米田 2009）。管見の限りでは、浄楽寺第 12 号古墳の勾玉は鉄針による片面穿孔である。米田氏の分類に基づく「片面Ⅱ e 類」もしくは「片面Ⅱ e' 類」の穿孔技術となる。これらは、孔貫通時の円錐の割れが認められるか否かで細分されている。浄楽寺第 12 号古墳の勾玉は、穿孔時の円錐状の割れが観察できるものの顕著な割れとは言い難いことから、片面Ⅱ e' 類に分類できると考えられる。この穿孔技術が主体となる時期は古墳時代前期後半から中期前半とされており、浄楽寺第 12 号古墳出土の勾玉についてもこの範疇に収まるものと考えられる。

石材に関しても、前Ⅶ期までは淡い色調かつ透明度が高いものを使用することが多い一方で、中Ⅰ期になると比較的濃い色調かつ透明度の低いものを使用するようになる（大賀 2009）ことも、浄楽寺第 12 号古墳の瑪瑙製勾玉が中Ⅰ期以降に帰属する可能性が高いことを示唆している。

あわせて、副葬時の玉の組み合わせについてもみてみよう。浄楽寺第 12 号古墳では瑪瑙製勾玉が 2 点出土していることは先述したとおりである。県立歴史民俗資料館に展示中の勾玉以外に出土したとされる、もう 1 点の瑪瑙製勾玉は写真や実測図が残っておらず、その形状等をうかがうことはできないが、1956 年の報告では「長さ約 3 糎の濃いアメ色のメノウ製勾玉 2 個」が出土したと記載されている（松崎・潮見 1956）。このことから、2 個の瑪瑙製勾玉は大きさや石材の質・色調が類似している資料であったと考えられる。このように同質同形で 2 個一対を単位とする副葬例は中Ⅰ期の勾玉副葬例の特徴とされ（米田 2020）、形態的特徴から推定される帰属時期とも矛盾しない。

以上のように形態的特徴、穿孔技術、副葬時の組成、また使用された石材の特徴から推定される帰属時期をまとめると、浄楽寺第 12 号古墳出土の瑪瑙製勾玉は、大賀編年における中Ⅰ期を上限とすることができるといえよう。

ここまで古墳時代中期の県内出土の瑪瑙製勾玉と浄楽寺第 12 号古墳出土の瑪瑙製勾玉について検討を行った。これらの検討を踏まえたうえで、米田氏の中四国地方における勾玉の変遷に基づ

き安芸・備後地域における瑠璃製勾玉の変遷を考えると、第6図のような試案を提示することができる⁽³⁾。その多くは中Ⅱ期以降のものであり、中Ⅰ期に帰属すると考えられる浄楽寺第12号古墳の瑠璃製勾玉は、県内出土の瑠璃製勾玉の中でも古段階に位置づけられる資料であると考えられる。瑠璃製勾玉が安芸・備後へ波及し始めた時期の玉類の組成などの様相を示す資料とすることができるだろう。(岸本)

5 おわりに

今回の整理・調査で明らかとなった遺物の内容は、円筒埴輪(Ⅲ群)、壺形埴輪(筒状)、刀子(片関)、鉄鏃(狭身有軸式)、短甲片(革綴式)、瑠璃製勾玉(片面穿孔)となる。これらの特徴、特に埴輪によって築造時期が限定される。浄楽寺第12号古墳の築造は、古墳時代中期前葉新相、中四研新編年のⅦ期(村田・永野2022)、4世紀末～5世紀前葉に相当する(岩本2022)時期に行われたと考えることができる。

今回の主要な成果としては、①各遺物型式の組合せと特徴を明示した上で古墳の築造時期を客観的に限定できたこと、②県内では類例の少ない円筒埴輪Ⅲ群の出土例と判断できること、③県内では類例の少ない壺形埴輪を発見し共伴遺物から時期を特定できたこと、④「短甲片」を短甲片と判断する根拠を確認・公表できたことの4点を考えている。浄楽寺・七ツ塚古墳群の出土・採集遺物は、浄楽寺第12号古墳以外にも存在している。今後も整理作業・資料調査を行い、記録・公表を進めることで、各古墳の築造時期・性格を一つずつ特定し、古墳群全体の評価につなげていきたい。

昭和29年出土資料を所蔵する広島大学考古学研究室の野島永先生からは、資料の整理・接合・調査実施許可をいただいた。また、同研究室所属学生(当時)の宇野真太郎、永野智朗の両氏からは、広島大学保管分資料に関する情報提供を受けた。広島県立歴史民俗資料館からは、広島大学所蔵分資料の調査に際して配慮をいただくとともに資料館収集保管分資料の調査実施許可をいただいた。奈良文化財研究所の川畑純氏からは、短甲片の部位判断について有益な意見をいただいた。記して深謝申し上げます。(村田)

古墳前期
前Ⅶ期

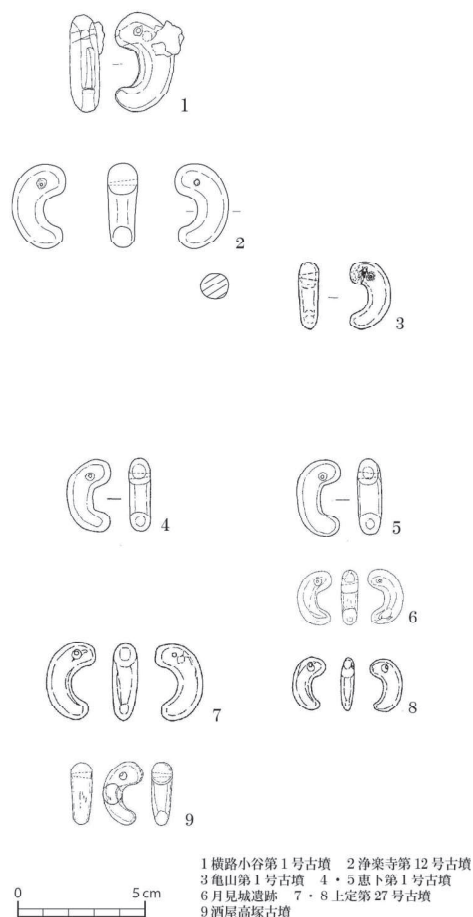
古墳中期
中Ⅰ期

中Ⅱ期

中Ⅲ期

中Ⅳ期

古墳後期
後Ⅰ期



第6図 安芸・備後出土の瑠璃製勾玉の変遷 (1/3)

注

- (1) 浄楽寺第 12 号古墳からは家形埴輪が出土しており、その大半は大学に保管されている。資料館にも微量の破片が貸し出されているが、そのみでは十分な評価は行えないため、今回の紹介に家形埴輪は含めなかった。
- (2) 時期区分は大賀 2002 に基づく。
- (3) 鍛冶 1982・桑原編 1983・中田 1977・藤田編 1987・道上 1987・青山編 1987 より一部改変し、岸本作成。

写真図版出典

図版第 1～6、7（瑪瑙製勾玉 20 を除く）：村田撮影。図版第 7（瑪瑙製勾玉 20）：岸本撮影。

引用・参考文献

青山 透編 1987『酒屋高塚古墳』広島県教育委員会。

一瀬和夫 1988「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大水川改修にともなう発掘調査概要』Ⅴ、大阪府教育委員会。

一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編 2011『古墳時代史の枠組み』古墳時代の考古学 1、同成社。

伊藤 実 2004「古墳時代・古墳」『三次市史』Ⅱ、三次市。

岩本 崇 2022「中期古墳年代論－相対編年とその暦年代－」『新編年で読み解く地域の画期と社会変動』中期古墳研究の現状と課題Ⅵ、中国四国前方後円墳研究会第 25 回研究集会（島根大会）実行委員会。

植田千佳穂 2003「史跡浄楽寺・七ツ塚古墳群測量調査報告」『広島県立歴史民俗資料館研究紀要』第 4 集、広島県立歴史民俗資料館。

植田千佳穂 2005「史跡浄楽寺・七ツ塚古墳群測量調査報告Ⅱ」『広島県立歴史民俗資料館研究紀要』第 5 集、広島県立歴史民俗資料館。

大賀克彦 2002「凡例 古墳時代の時期区分」『小羽山古墳群』福井県清水町教育委員会。

大賀克彦 2009「山陰系玉類の基礎的研究」『出雲玉作の特質に関する研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター。

鍛冶益生 1982「横路小谷古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（3）、広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター。

川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 巻第 2 号、日本考古学会。

川部浩司 2008「四国北東部地域の壺形埴輪」『樞原考古学研究所論集』第十五、八木書店。

岸本晴菜 2020「広島県における古墳出土玉類とその組成」『広島県立歴史民俗資料館研究紀要』第 9 集、広島県立歴史民俗資料館。

木村 理 2022「古墳時代中期の円筒埴輪」『埴輪の分類と編年』埴輪検討会。

蔵本晋司 2004「丸亀市吉岡神社古墳の再検討」『香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』Ⅺ、香川県埋蔵文化財調査センター。

桑原隆博編 1983『亀山遺跡第 2 次発掘調査概報』広島県教育委員会。

近藤義郎編 1991『前方後円墳集成』中国・四国編、山川出版社。

阪口英毅 2019『古墳時代甲冑の技術と生産』同成社。

下江裕貴・村田 晋 2020「史跡浄楽寺・七ツ塚古墳群の採集資料－浄楽寺第 37 号古墳と七ツ塚第 11・49 号古墳－」『広島県立歴史民俗資料館研究紀要』第 9 集、広島県立歴史民俗資料館。

- 鈴木一有 2003「中期古墳における副葬鏃の特質」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集、帝京大学山梨文化財研究所。
- 高橋 工 1995「東アジアにおける甲冑の系統と日本」『日本考古学』第2号、日本考古学協会。
- 谷澤亜里 2022「弥生・古墳時代の玉類にみる長期保有」『考古学研究』第69巻第2号、考古学研究会。
- 中田 昭 1977「恵下B地点遺跡」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』広島県教育委員会。
- 廣瀬 覚 2011「西日本の円筒埴輪」『古墳時代史の枠組み』古墳時代の考古学1、同成社。
- 廣瀬 覚 2015『古代王権の形成と埴輪生産』同成社。
- 廣瀬 覚 2021「王権からみた古墳時代後期の山陰の埴輪」『古墳時代後期における山陰の埴輪』第48回山陰考古学研究集会事務局。
- 藤田広幸編 1987『月見城遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター。
- 古瀬清秀 1992「古墳時代における備後北部地域の特質」『吉備の考古学的研究』（下）、山陽新聞社。
- 松崎寿和・潮見 浩 1954「広島県三次市神杉常楽寺古墳群調査概報」『広島大学文学部紀要』第6号、広島大学。
- 松崎寿和・潮見 浩 1956「常楽寺古墳群調査報告」『広島県双三郡三次市史料総覧』第1篇、双三郡三次市史刊行会。
- 道上康仁 1987「上定古墳群の調査」『大判・上定・殿山』広島県埋蔵文化財調査センター。
- 村田 晋・永野智朗 2022「広島県」『新編年で読み解く地域の画期と社会変動』中期古墳研究の現状と課題Ⅵ、中国四国前方後円墳研究会第25回研究集会（島根大会）実行委員会。
- 村上久和 1988「壺形埴輪の変遷」『一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』（Ⅰ）、大分県教育委員会。
- 米田克彦 2009「穿孔方法から見た出雲玉作の特質と系譜」『出雲玉作の特質に関する研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター。
- 米田克彦 2020「中四国地方における中期古墳の玉類副葬」『副葬品による広域編年再考』中期古墳研究の現状と課題Ⅳ、中国四国前方後円墳研究会第23回研究集会実行委員会。

（むらた すすむ 広島県教育事業団・きしもと はるな 広島県教育事業団）



円筒埴輪 1



円筒埴輪 2



円筒埴輪 (右から3・4)



円筒埴輪 (右から5・6)



円筒埴輪 7



円筒・壺形埴輪（左から 9・8・11）



円筒埴輪 1 底面



円筒埴輪 2 基底部



円筒埴輪 2 底面



円筒埴輪 4 突帯片



円筒埴輪 5 基底部



円筒埴輪 6 突帯片



円筒埴輪 7 基底部



円筒埴輪 8 ヨコハケ



壺形埴輪10



壺形埴輪10 頸部片



壺形埴輪10 体部内面



壺形埴輪10 底部外面



壺形埴輪10 底面



刀子12



鉋15



鉋17



刀子13



刀子14



鉋16



鉋18



刀子14 破断面



鉋15 破断面



鉋16 破断面



鉋17 側面



鉋17 破断面



鉋18 破断面



短甲片19 内側



短甲片19 外側



短甲片19 内側



短甲片19 外側



短甲片19 破断面（短辺側）



短甲片19 破断面（長辺側）



瑪瑙製勾玉20 a 面



瑪瑙製勾玉20 b 面